

札幌の百メートル道路

佐藤馨一*

札幌の百メートル道路である大通公園は、当初、火防線として計画されたものであり、その後、逍遙地として樹木や花が植えられ、公園と道路という二つの機能を持つ空間として整備されてきた。この大通りの特徴は、まちづくりのスタート時点から存在したことであり、市役所、銀行、市民会館、新聞社等の中枢的都市機能が集積し、さらに雪祭りなどのイベントが開催される広場として市民に親しまれてきた。21世紀においては、大通公園の東進が構想され、まちづくりの基軸、交通の幹線、市民の憩う公園としてその役割はさらに高くなる。

Sapporo's 100-meter Wide Road

Keiichi SATO*

Odori Park, Sapporo's 100-meter wide road, was originally planned as a fire break. It was later planted with trees and flowers and redesigned into a space with dual functions of park and roadway. The Odori was included in the town planning in the area from the beginning and it is a square which is well used by the citizens as the location of the city office, banks, community hall, newspaper offices and other central city functions as well as the site for events such as the Snow Festival. In the twenty-first century, there is a plan for Odori Park to grow further eastward and it will become more prominent as the hub of the city, the main traffic thoroughfare and a park for the use of its citizens.

1. 札幌本府の誕生

札幌市民に、もっとも札幌らしい場所を聞いたとき、10人中8人は大通公園と答えるであろう。それほど大通公園は札幌市民に親しまれ、札幌の歳時記とともにある。

しかしこの大通公園を、札幌の百メートル道路として意識している市民はさほど多くない。大通公園は道路としてより公園として活用され、市民の広場として機能しているためである。現在の大通公園は札幌の南と北を分ける境界線になっているが、その

始まりは札幌の創建時にまで遡るものである。大通公園は道路としてより、公園としてより、札幌開基の基線としてつくられた都市空間であった。

1869(明治2)年11月、開拓使判官島義勇は今の大通4丁目に仮小屋を建て、北海道開拓の本府建設に取りかかった¹⁾。島の計画は本府を南北に二分し、その中央に幅42間(76.4m)の大通りを設け、北部には官用地として開拓使本庁舎や学校、病院等を、南部はすべて商家地区とした。市街地はすべて縦横に区画し、道路幅は大通の42間以外は12間(21.8m)とした。しかしこの計画は食料や建設資材の購入に多額の経費を要し、加えて厳しい気候条件や劣悪な地質条件のために中止されるに至った(Fig.1)。

1871年1月、札幌本府建設が再開され、岩村通俊判官が責任者に任命された。岩村は市街地を測量し、

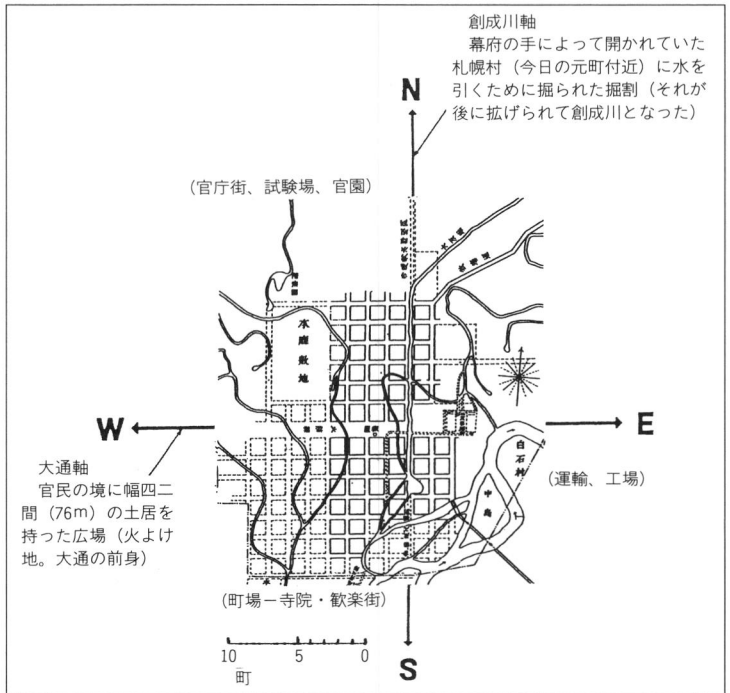
* 北海道大学工学研究科教授
Professor, Graduate School of Engineering,
Hokkaido University
原稿受理 1997年12月5日

1街区の大きさを60間(109m)四方、道路幅を11間(20.0m)、裏通りを6間(10.9m)とし、南北の間には58間(105m)の火防線を設けた。この空間こそ大通公園の原型であり、1872年には後志通りとして道路機能が備わるようになった(Fig.2)。

ところで札幌は、なぜ北海道開拓の本府の地として選択されたのだろうか。札幌の地を北海道開拓の中心とすべき件については、1785(天明5)年に蝦夷地を探検した山口鉄五郎らの一行が、石狩原野を本府の適地として認めたことに始まり、1807(文化4)年に近藤重蔵が蝦夷地の枢要の地として建議している。また1858(安政5)年、松浦武四郎が札幌周辺を踏査し、本府建設の地として推薦している。当時の札幌はまったくの原野であり、数人の和人と数十人のアイヌ人しか住んでいなかった。

都市は交通の結節点に誕生するという法則に従えば、札幌はこの法則に反する都市である。札幌は道のない内陸部に拠点を定め、そこから海へ、内陸部へ交通路を広げていった。自然発生的に誕生した都市ではなく、人工的に、ある意図をもって建設された都市なのである。その意図とは何であろうか。この謎を解く鍵は、中国のアヘン戦争にある²⁾。

第一次アヘン戦争に勝利したイギリスは、清国との交易条約を結ぶことを要求したが、清国はそれを極力回避してきた。そこでイギリスは再び清国を攻撃し、第二次アヘン戦争が勃発した。1860年、清国は破れ、イギリス、フランス、ロシアと清国政府は北京条約を締結するに至った。この結果、イギリスは香港を租借し、中国貿易の拠点を築いた。またロシアは中露北京条約を強引に結び、清国から中国東北部の沿海州をかちとった。ウラジオストークはロシアが沿海州に建設した港湾都市であり、太平洋に進出する念願の不凍港を得たのである。この都市はロシアの野望を実現するための都市であり、ウラジ(征服する)、ウォストーク(東方)という露骨な名が付けられた。

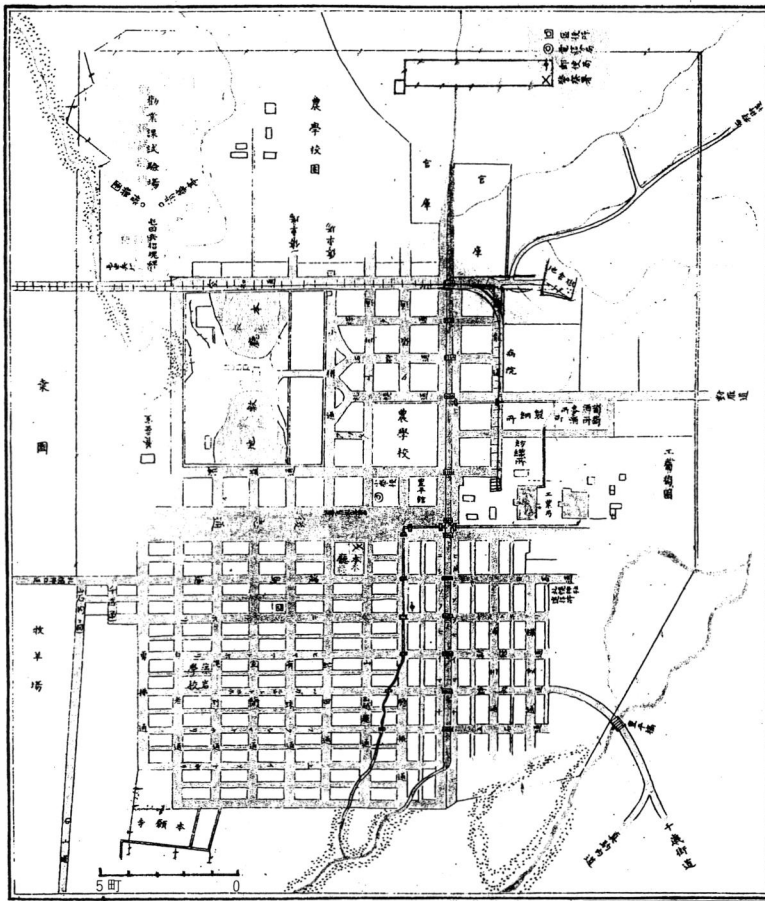


出典) 参考文献1)。
Fig.1 島義勇の構想した札幌本府

ウラジオストークを母港としたロシア船は日本海沿岸に出没し、挑発行為を繰り返した。このことに強い危機感を抱いたのが、長崎を後方支援する鍋島藩(佐賀)の藩主直正公であった。とくに直正公は、松前藩の支配する蝦夷地が隙だらけなことを懸念し、ロシアの侵略を防ぐためにも蝦夷地警護の強化を幕府に進言した。さらに自らの腹心であった島義勇を蝦夷地に派遣し、情報収集にあたらせた。

1868年に徳川幕府が倒れ、明治政府が樹立された。倒幕の功労者でもあった鍋島直正公には、明治政府の重要なポストが用意された。しかし直正公はそれらのポストに関心を示さず、蝦夷地の開拓・防衛を職務とする開拓使(長官)を希望した。そして直ちに着手したのが北方警護の拠点、すなわち北海道開拓の本府を定めることであった。すでに蝦夷地の地理、情報に精通している島が本府の選定と建設の責任者となり、札幌が本府として正式に選定された。

札幌は当初、防衛都市として建設されたのであり、道路計画や主要都市施設の配置を見ると、最後の城下町として構想されたことがうかがわれる。大通公園が火防線として計画されたのは、このような背景があったのである。



出典) 参考文献1)。

Fig.2 札幌市街図 (明治14年)

2. 太平洋戦争前的大通公園³⁾

1871(明治4)年4月、札幌本府建設のために測量が行われ、大通りは火防線として、また札幌の基軸として建設された。街区の区割りには60間であり、大通りも60間と計画していたが、実測の結果58間しかなく、今日に至っている。このようなわずかなミスをものともせず、本府の建設は順調に進行し、次第に町並みが整ってきた。

1872年9月、開拓使は札幌本府の道路に北海道の地名を付けることにした。

大通りが後志通りと呼ばれるようになったのはこの時からである。ちなみに後志地方とは、小樽市、倶知安町、ニセコ町を含む北海道西部の地域名である。しかし、地名を道路名とする混乱や煩わしさのため通り名は普及せず、1881(明治14)年に札幌市街名称の改正が行われ、条丁名制に改められた。

大通り北側に設けられた官用地は60間四方を一画としたが、南側の商用地は伸通りによって小分けされている。これは官優先のまちづくりを示すものであり、大通りの南にある薄野周辺において酔客が住所で店を探せない遠因となっている。

大通りは札幌建設の基軸としてつくられ、札幌の政治、経済、教育、生活の中心として機能した。開拓使の本庁から北海道庁に至る北海道行政の中心地は、北3条西6丁目の官地に置かれていたが、札幌区役所、市役所の位置は大通り界隈を転々とし、今日に至っている。1870(明治3)年2月、南1条東2丁目に町会所を設け、町代が置かれた。1872年4月、町代に代わって戸長が置かれ、庁舎が南2条西2丁目に移された。1873年1月、町会所が市会所に改められ、建物は南大通3丁目に移り、区長が置かれた。1875(明治8)年6月、市会所が第一大区区務所と改められ、1879(明治12)年に南2条西5丁目に庁舎が

新築された。翌1880年、区制実施によって札幌区となった。1892(明治25)年5月、札幌区役所が大火で類焼し、やむをえず南大通3丁目の旧庁舎で執務が行われた。その後、何回か区役所の位置が変わったが、1909(明治42)年8月、大通西2丁目に庁舎を新築し、ようやく落ち着いた。

1922(大正11)年8月に市政が実施され、1937(昭和12)年4月、北1条西4丁目に鉄筋ビルの市庁舎が建設された。その後、1971(昭和46)年11月、北大通西2丁目に高層ビルの市庁舎が新築され、今日に至っている。

大通りの空間利用は火防線や道路にとどまらず、多目的の利用に供されたのは1874(明治7)年頃からである。その手始めとして、西3、4丁目に2000坪(6,600㎡)の花壇がつくられた。植えられたのは開拓使が札幌官園で栽培した洋種の花であり、市民の人気を集めた。

1877(明治10)年8月、東京で開催された第1回国勸業博覧会に開拓使からも出品し、好評を得たことから翌年の1878(明治11)年10月、大通西2、3丁目で第1回農業博覧会が開催された。この博覧会には札幌農学校も全面的に協力し、洋種の野菜、果物、家畜に市民の関心が集まった。

1880(明治13)年10月、第2回農業博覧会が大通西2、3丁目で開かれ、前回にまして盛況であった。新しい農産物を奨励するため審査会が設けられ、開拓使役人、札幌農学校教師のほかエドウィン・ダン、ルイス・ポーマらのお雇い外国人も審査委員に加わった。この年はまた、札幌にとって記念すべき年であった。小樽—札幌間の鉄道が開通し、札幌新聞が発刊され、札幌区役所が新築され、札幌農学校の第1回卒業式が行われた。農業博覧会はその後も開かれたが、大通りが手狭なため、1887(明治20)年から中島遊園地に会場が移された。

大通りの広場を市民とは別な立場で利用したのが、屯田兵であった。1875(明治8)年、北海道に屯田兵村を設けることが決められ、翌年、札幌の防衛任務を担うため琴似、山鼻地区へ第1、第2中隊の屯田兵が配置された。屯田兵事務局は開拓使本庁に置かれたが、第1、第2中隊を統括する第1大隊本部は大通西10丁目に設けられ、その一画が練兵場として活用された。この練兵場では大隊の総合訓練、演習、閲兵等が行われ、その後大通りは、日露戦争の出征行事や戦勝祝賀行列の場として使われていった。

運動会の前身である遊戯会は、札幌農学校が1878

(明治11)年5月、全国に先がけて開催した。会場は当初、札幌中心部の道路が利用され、その後農学校の校庭へ移された。娯楽の少なかった当時、農学校の遊戯会は全市民の楽しみとなり、お祭りのように盛り上がった。この遊戯会が他の学校にも影響を与え、師範学校や創成学校(後の中央創成小学校)の合同運動会が大通りの練兵場で開催された。小学校の運動会は子ども以上に親が夢中になり、会場となった大通りは市民の広場として定着していった。この運動会好きは平成の今日でも衰えることはなく、しっかりと引き継がれている。札幌に住む父親は、運動会の朝早く家族の見物席を確保するためにかり出され、母親は前日から煮染め、のり巻き、唐揚げと、ご馳走作りに精を出す。見物席には孫の晴れ姿を見るおじいちゃん、おばあちゃんが陣取り、リレーの選手になろうものなら一家の名誉とばかり声援するのである。

大通りの利用は公園としての利用と、練兵場としての活用の二本立で出発し、やがて日露戦争後、逍遙地として一元化された。大通りが火防線から、逍遙地へと変化していくことをうながしたものとして、豊平館の存在を忘れてはならない(Photo 1)。

豊平館は開拓使が建設した迎賓館であり、1879(明治12)年3月着工、翌1880年11月に完成した。木造半地階付きの総2階建てであり、デザインは米国木造建築様式を採用し、和洋折衷の前庭は大通りにはみ出すようにつくられた。1881(明治14)年8月、明治天皇の行在所となって格式が一段と高まり、各種の歓迎会なども開催された。豊平館は大通西1丁目という札幌開拓の原点に建設されこともあり、札幌の象徴として市民に親しまれた。

1918(大正7)年、北海道記者倶楽部の決議が発端となって開道50周年記念行事がとり行われた。すなわち博覧会が中島遊園地で開催され、その見学者は130万人を数えた。また中島公園まで市街電車が開通し、各種の全国大会が開かれた。



Photo 1 豊平館の全景

1919(大正8)年、道路法によって大通りは市道の認定を受け、1923(大正12)年都市計画法の適用を受けて公園となり、道路と公園という二重の性格を持つ空間となった。さらに1939(昭和14)年、東7丁目から西12丁目までを大通風致地区とし、都市における環境保全の体制が整えられた。しかし第二次大戦中は公園としての機能が失われ、市民の食料供給基地、イモ畑と化した。

3. 太平洋戦争後の大通公園

58間(105m)の幅員を持つ大通公園を住宅地や商業地に区割りすべきである、という意見は明治、大正期において再三出されてきた。その背景に、大通公園の空間が有効利用されないまま放置され、ゴミや雪が不法投棄されていたことがあげられよう。大通公園の戦後は、イモ畑とゴミ捨て場の整備から始まった。大通公園の再生に幸いしたことは、戦時中で燃料不足の折りでも樹木の伐採だけは避けてきたことにある。開拓使時代からなにかにつけて植えてこられた樹木は、緑を取り返す大きな力となった。

1950(昭和25)年から芝生の復旧、花壇の造成が始まった。大通公園の花壇は、市内の造園業者(当初15、後に50業者)と市の協力によって運営されており、札幌方式として全国に注目された。

筆者が中学校の修学旅行で札幌を訪れたとき、大通公園の芝生に人々がすわり、日なたぼっこやお弁当を食べている風景を見て驚いたことがある。それまで暮らしていた東北のまちでは、公園の芝生には

必ず、「入るべからず」という立て札があったからである。また大学の1年生になりたての頃、お酒を飲み過ぎて深夜、大通公園の芝生でダウンし、パトロールのお巡りさんに尋問されたことがあった。

「君々、こんなところで寝てはダメですよ。学校はどこかね」と聞かれ、「北大の1年生です」と答えたところ、「気をつけて帰りなさい」とだけ言って立ち去った。お巡りさんは私のことを高校生と見間違えたようだったが、「北大の1年生です」という一言が、水戸黄門の「葵の御紋」のように効力を現したことに気をよくし、意気揚々と寮に帰ったことを思い出す。

1957(昭和32)年8月、豊平館の跡地にテレビ塔が完成する。豊平館は大通公園から中島公園に移築され、結婚式場や音楽会場、謝恩会の場として活用され、健在である。しかし豊平館は時計台と同じように、大通公園周辺に保存すべきであるとの意見も多く、近代化遺産の保存と活用の難しさを問いかけている。

大通西1丁目に建設されたテレビ塔の高さは147.2m、地上90mに展望台が設けられている。このテレビ塔は札幌の東西南北の原点に位置し、付近に高層建築物が無かったこともあり、遠くから札幌のシンボルとして偉容を誇った。この展望台から俯瞰した大通公園は、地上からの眺めとまったく景観を別にした。北は石狩湾を望み、南は恵庭岳を眺望し、東は蛇行する豊平川を眺め、西は大倉山のジャンプ台を遠望することができる。テレビ塔はたちまちにして観光の名所となり、大型の雪像が立ち並ぶ雪祭りや、厳冬時のイルミネーション点灯時に絶好の見物場所として人気を集めている(Photo 2)。

環境整備の進んだ大通公園周辺は、商業・経済の中心地として土地利用が高度化されていった。1893(明治26)年、日本銀行札幌出張所が大通西6丁目に設立され、1900(明治33)年、北海道拓殖銀行が大通西4丁目に設置された。さらに北海道銀行が大通西5丁目に、北洋銀行が大通西3丁目に、札幌銀行が西5丁目にそれぞれ本店をかまえた。しかし北海道拓殖銀行が1997(平成9)年11月、営業権を北洋銀行に譲渡して消滅することになり、北海道開拓の歴史は終焉した。

大通公園はまた、北海道における情報・通信・電力の中枢地でもあった。1872(明治5)年、大通2丁目に郵便局が設置され、1875年になると電信局が設けられて電報を取り扱った。1962(昭和37)年、札幌



Photo 2 テレビ塔から俯瞰した西側の景観

中央郵便局は北4条西6丁目に移転し、札幌軟石でつくられた由緒ある局舎は明治村に譲渡された。しかしその跡地に電電公社のビルが建設され、さらに中島公園にあったNHKの演奏所が西1丁目に移され、NHK札幌放送局の建物が新築された。北海道新聞は1901(明治34)年に創刊された北海タイムスを母体とし、それ以来、大通西3丁目に本社が置かれてきた。1956(昭和31)年10月、北海道電力の本社ビルが大通東1丁目に完成し、その地下に変電所が設置された。テレビからこれらの建物を見るとパラポラアンテナが林立し、大通りが情報通信の中心地であることを実感する。

大通公園の南側は商業地として整備され、明治30年代の札幌市街明細案内図を見ると南1条西3丁目に丸井呉服店(現丸井今井デパート)、池内商店(現池内デパート)、岩井靴店、斉藤薬店など、今日でも老舗を誇る店舗が記されている。1931(昭和6)年、三越百貨店が南1条西4丁目に札幌支店を開設し、この付近が都心商業の中心地となった。1971(昭和46)年11月、地下鉄の開業と同時に地下街が完成し、大通公園の地下2階にオーロラタウンという商店街が誕生した。

島が構想し、岩村が建設した58間(105m)の大通りは、100年後において火防線から道路、逍遙地、公園と変化し、今や170万都市の政治、経済、文化を担う中枢の地と変貌した。都市における広幅員道路は、かくも多くの可能性を秘めた都市空間であることに感嘆する。

4. 大通公園の行事

4-1 札幌の雪祭り

大通公園をメイン会場にして開催される札幌雪祭りは、大通公園を全国的に有名にした。1950(昭和25)年2月、西7丁目広場に中学校、高等学校の生徒らの手による雪像がつくられた。わずか1日の会期であったが、市民の関心は高く、規模は年々拡大していった。1997年の雪祭りは第48回となり、会場は大通西1丁目から西11丁目へ、さらに真駒内会場も加わり、会期5日間、雪像数300基以上、延べ入場者数200万人をこす大イベントとなった。

札幌の雪祭りが成功した第一の要因は、街の中心部に大きな広場、大通公園を持っていることが指摘できる。昨今、類似の冬祭り、氷祭りが北海道内で開かれているが、いずれも会場の確保に苦労している。高層建築を両側に従えた幅105mの帯状広場に

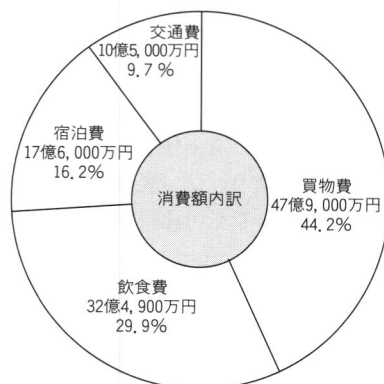
大型の雪像があるからこそ、人々は感動するのである。街はずれの野原に雪像が置かれても、そのスケール感は大自然にとうてい及ばない。雪像の大きさは周辺建物の高さと同じ関係を持ち、その形はテレビ塔の上から眺められることを意識してデザインされている。都市も女性も、人から眺められることによって美しくなるものらしい(Photo 3)。

雪祭りの経済効果については、次のような報告がある⁴⁾。第38回(1987年)の雪祭りに要した費用は約9,600万円であり、会場費(警備・清掃・設備費)が40%、雪像費(雪輸送費・材料費)が26%を占めている。ただしこの中には、雪輸送や雪像制作に当たる自衛隊員の人件費は含まれていない。この費用の負担は札幌市が25%、一般企業の協賛金が44%広告収入が28%となっている。

雪祭りの効果は短期的なものと同期的なものに分かれ、そのうち短期的な経済効果をまとめたものがFig.3である。期間中の消費額は市民の消費を含めて約108億円と推計されており、波及効果まで含めると約140億円になる。とくに買物費が約48億円、飲食費が約33億円という数字を見ると、「商店の2



Photo 3 雪祭りの雪像



出典) 参考文献4)。

Fig.3 雪祭りによる消費額の内訳

月不況対策」という目的は十分達成されていることがわかる。

長期的な非経済効果として、札幌の知名度が上がり、イメージの高まったことがあげられる。札幌オリンピックの開催は札幌の名を全世界に広め、同時開催された雪祭りの映像は全世界に放送された。現在、世界各地に雪像制作技術者が派遣され、大通会場には世界の広場が設けられ、雪像の国際コンクールが開催されている。

4-2 札幌の夏祭り

札幌の春は遅く、とくに大通公園には雪像を壊した大雪塊が無惨にも放置されている。この雪も消える5月中旬、大通はライラック（フランス語名：リラ）の花が咲き、活気を取り戻す。ライラックは大通の西1丁目から12丁目まで植えられており、とくに西6丁目付近にある大きなニレの木の下で咲くライラックはまことに見事である。1955（昭和30）年に札幌を訪れた歌人の吉井勇は、この街を次のようにうたった。

家ごとにリラの花咲き札幌の
人生は楽しく生きてあるらし

6月中旬、札幌祭りが開かれる。正式には北海道神宮例大祭と呼ばれているが、格上げされた北海道神宮より、古くからの呼び名である札幌神社の方が市民に親しまれている。北海道神宮の御霊は伊勢神宮で分霊され、鳥判官の背で北海道に運ばれてきた。その功を讃えられた鳥は、北海道神宮の正門脇に銅像として建っている。鳥が構想した札幌本府の名は、現在でも生きている。南大通から南2条、西1丁目から8丁目は本府町内会と呼ばれ、お祭りを仕切る男たちは「本府」と染めた法被を着る。

7月中旬から8月中旬まで大通りは夏祭りで賑わう。大通西5、6、7、8丁目の広場にはサントリー、アサヒ、麒麟、サッポロのメーカーが工場直結のビールを用意し、総計で5,000席をこす世界でも最大規模のビアガーデンが出現する。大通の両側にあるオフィスビルから、仕事の終わったサラリーマン・OLが立ち寄り、短い夏のひとときを楽しむのである。さわやかな夏の札幌のビールは本当においしく、それだけにビール会社にとっては一目瞭然に人気のわかる恐ろしさがある（Photo 4）。

8月13日を迎えると大通西8丁目広場は、盆踊り会場に変身する。流れる曲は「北海盆歌」のみであり、これが夕方6時頃から10時頃まで延々と続く。たまにはソーラン節もよいのではないかと思うこと

もあるが、札幌では絶対に受け入れられない。

9月になると木の葉が色づき、大通公園の人出はめっきり少なくなる。しかし、詩人はこの季節に感動した。1907（明治40）年9月、札幌を訪れた石川啄木は、「札幌は秋風の国なり。木立の市なり。おおらかに静かにして、人の香よりは木の香こそ勝りたれ」と称した。そして次の歌を残した。

しんとして幅廣き街の秋の夜の
玉蜀黍の焼くるにおいよ

12月に入り、ホワイトクリスマスの曲が流れ出す頃、大通公園の木々は何十万個というイルミネーションで輝きを増す。とくに純白の雪が枝に積もり、色さまざまなイルミネーションがきらめくとき、札幌は幻想的なロマンの街となる。雪の中にライトアップされた時計台は大通公園のすぐ近くにあり、深夜に響く鐘の音は今も、昔も変わらない。

5. 大通公園の役割と今後の将来展望

大通公園の歴史をふりかえると、都心の開放空間は都市の成熟度によって存在意義を増すことが理解できる。札幌の人口が30万人に満たない戦前においては、105m×1000mの空間はあまりにも広大であり、雪捨て場やゴミ捨て場と化した。しかし170万人をこす今日においては、大通公園はかけがえのない都市空間として活用されている。

大通公園の公園機能をまとめると、①都市シンボルの場、②休養・レクリエーションの場、③祭り・催事の場、④観光の場、⑤コミュニケーションの場、⑥風致保全の場、⑦延焼防止と避難の場、⑧環境保全の場、となる。大通公園がこのような役割を持ち得たのは、この空間が都市誕生のときから存在し、ヨーロッパの都市における広場の役割を果たしてきたことによる。百メートル道路を持つ日本の都市は他にもあるが、都市創建時から百メートル道路を計画したところはなく、この点が大通公園の最大の特



Photo 4 納涼ビアガーデン

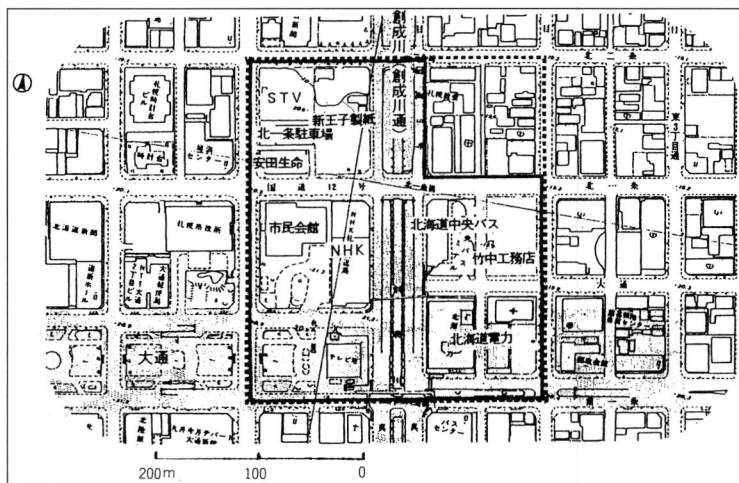


Fig.4 新しいシンボル地区

徴と言ってよい。

第二の特徴は大通公園を活用するソフトウェア、つまり市民行事の多彩さにある。雪祭り、ライラック祭り、夏祭り、ホワイト・イルミネーションと、札幌の市民はこの空間を有効に活用してきた。これだけのお祭りを開いている百メートル道路は、他都市にはない。さらに近年、札幌の若者らが作り出した「よきこい・ソーラン祭り」が全道の人気を集めている。この祭りは高知の「よきこい祭り」で使う鳴子もち、曲の一節にソーラン節を入れて、それぞれのチームが創作した踊りを披露するものである。今や踊りの参加者が1万人をこえ、見物客は100万人を数える大イベントとなった。この祭りのフィナーレが大通西8丁目で開催、最優秀賞をはじめとする各賞の発表があり、踊りの輪は最高潮に達する。

第三の特徴として、大通り機能の弱いことがあげられよう。つまり交通機能の点から見ると、大通公園は道路幹線軸としての機能を十分に果たしていない。この点に関して、「大通公園は公園機能に特化し、道路機能はできるだけ抑制することが望ましい」という反対意見もある。しかし大通公園周辺は、これまで説明してきたように行政・経済・文化・情報等の中心地として重要な機能・役割を担ってきた。これらの役割を維持し、さらに向上させるために、札幌市においては地下鉄の南北線、東西線、東豊線

の3線を建設し、いずれの線も大通駅に乗り入れている。

札幌市は現在、21世紀のまちづくりの基点となる新しいシンボル地区を構想中である。このシンボル地区は大通公園と創成川の交点付近を想定しており、テレビ塔の撤去、北電本社の移転、NHK札幌放送局の建て替え等がメニューとして上がっている。また、南北を走る創成川幹線道路を地下へ移し、地上を歩行者に開放し、水のせせらぎを取り戻す創成川ルネッサンス計画も検討中である。

大通公園は東に延伸し、豊平川ーシンボル地区ー円山公園という雄大な東西軸を創ることも構想されている。その意味で大通公園は、21世紀においてもまちづくりの基軸であり、道路と公園の二つの機能を持つ札幌の百メートル道路、大通公園は西洋の都市の持つ広場と、東洋の都市の持つ大路を兼ね備えた都市空間として機能していくであろう。

参考文献

- 1) 札幌市史編集委員会『札幌市史』1953年
- 2) 佐藤馨一「土木紀行、大通公園」『土木学会誌』第80巻1号、P.40
- 3) 札幌市教育委員会『大通公園』札幌文庫32巻、1985年
- 4) 『土木工学ハンドブック 第46編寒冷地施設』P.1991、1995年